廣斎（江戸時代後期）画　神功皇后掛軸（神社蔵）

神功皇后と常陸国（茨城県）の伝承

三石神社　宮司　小林友博

師走の候、氏子崇敬者の皆々様におかれましては、ご健勝にてご活躍のこととご同慶に存じます。又、年頭の正月より一年間各種神事行事に対しましてご崇敬ご奉献を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、当神社祭神の神功皇后伝承は『古事記』『日本書紀』（以下『記』『紀』）を基として諸書に記されているが、その伝承地は北陸・西日本・紀州と韓半島が主であり、常陸国（大化改新後に成立。『常陸国風土記』（養老年間（七一七～七二四年）に完成したとされる）には孝徳天皇の御世とし、現在の茨城県の大部分）にも神功皇后伝承が見られることは余り知られていない。『常陸国風土記』行方郡の芸都の里の南の田の里（茨城県行方市麻生が遺称地）の条に、「息長足日売の皇后の時、此の地に人あり。名を古都比古といふ。三度（『記』『紀』には一回だけの征討を記すが、その後も三韓との折衝時に使者として派遣されたのであろう。帰化人系氏族とも考えられている）韓国に遣はされぬ。其の功労を重みして田を賜ひき。因りて名づく」と見え、古都比古が神功皇后の三韓征討に従軍し、その戦功によって戦功田を与えられたとする（八世紀には神功皇后の新羅親征伝承が常陸国にも知られていたことがわかる）。古く我姫の国であった常陸国は、早くから大和朝廷の支配関係があったことが知られ、『常陸国風土記』には三世紀の天皇である崇神天皇の御世の伝承（四道将軍の派遣ー東方十二道の平定）も見られるところから（景行天皇の皇子、ヤマトタケル命の伝承も多く記されている）神功皇后御代にも東国の支配関係が続き、大和王朝の在野氏族として古都比古も神功皇后の三韓征討に従軍したのであろう。また、茨城郡の郡名由来の条の分注に、「茨城の国造が初祖、多祁許呂命（天津彦根命の子孫）は息長帯

発行所
三石神社社務所
神戸市兵庫区
和田宮通3丁目2-51
TEL (078)671-2531
FAX (078)671-7667
E-mail info@mitsuishi.or.jp
URL http://mitsuishi.or.jp

○ご家庭・会社事務所に神棚を祀りましょう。
○お伊勢さんのお神札（神宮大麻）と三石さんのお神札を合せ奉斎しましょう。
○お神札は、毎年末もしくは新年に新しく改めてお祀りしましょう。

比売の天皇（神功皇后）の朝に仕へて、品太の天皇（応神天皇）の誕れまし時までに至れり。多祁許呂命に子八人あり。中の男、筑波使主（人名）は、茨城の郡の湯坐連等が初祖なり」（湯坐連は、貴人の子女の湯浴に奉仕した氏族で名としたもので、産児に湯をつかわせる役の女性。また、皇子・皇女の養育者をもいい、湯殿に奉仕する人の意でもある）と見え、多祁許呂命（建許呂命とも）は息長帯比売天皇の大和王朝に仕え、品太天皇誕生の時までいたとするところから、多祁許呂命が、品太天皇の湯坐奉仕者であったと考えられ、その子の筑波使主から専属の湯坐奉仕者になったのであろう。多祁許呂命の子供八人（『先代旧事本紀』の「国造本紀」には、宮富鷲意弥命、大布日意弥命、深河意弥命、屋主乃弥命、宇佐比乃弥命、建弥依米命、加米乃意美命七人の名が見える）のうち七名は大和王朝の在野氏族となり、筑波使主は湯坐連らの初祖とするが、『新撰姓氏録』には常陸国筑波関係の湯坐連は見えない。しかし、湯坐連は『姓氏録』に額田部湯坐連（左京神別下・天孫の条）と見え、若湯坐宿禰（左京神別上・天神の条）なども見える。

古代においては、女性の妊娠と死亡率の高かった出産は恐れ多い一大行事であった。『記』・『紀』・『風土記』逸文・『万葉集』などには、神功皇后も兒饗石（皇子産の石）を腰に挿み安産と、生まれた皇子の無事成長を祈られた故事が記されていることなどにより、当社も三つの小石（白と黒）の入った安産御守を授与している。

新生児の死亡を免れるために邪気を祓い、無事に成長するように関わる古代の湯坐も大切な行事の一つであった。湯坐は時代が下った平安時代では御湯殿の儀式と称し、寛弘五（一〇〇八）年九月十一日に一条天皇の第二皇子敦成親王（後の後一条天皇）が御誕生になられた際の御湯殿の儀式（朝夕二回、七日間）が『紫式部日記』に見える。古代から続いた湯坐連の湯坐行事もこの様に行われていたのであろう。詳細に記され、めずらしいのでその様子を述べれば、御湯殿は夕暮れ時に行なわれ、関係者は白を基調とした装束を身にまとい、中宮職の下級職員が白いおおいをした桶のお湯を運び、お水取り役女房の二人がお湯を取り次いで、それに水を加えて湯加減を見ながら、白い元結いをした女房二人に渡す。二人の女房はお湯を御瓮の十六壺に順々に汲み取り満たし、余ったお湯は湯舟に戻す。御湯殿の役は宰相君（女房、藤原道綱の娘豊子）が、御介添え役は大納言君（女房、源簾子）が務める。殿（藤原道長）が若君（敦成親王）をお抱き、小少将君（女房、源時通の娘）が御佩刀（天皇から賜った刀）を持ち、虎の頭（造り物で魔除けの為に用いる）を宮内侍（内裏女房、橘良芸子）が持って若宮の先導を務める。その間、殿の二人の御子や源少将雅通らが、大声で散米（魔除けの為に霊力ある米を撒くこと）を行ない、続いて、読書に奉仕する読書博士（御湯殿の儀で紀伝明経の博士が漢籍の目出度い文章を選び読む）は蔵人弁藤原広業で、『史記』の第一巻を読む。周りには魔除けの呪に弓の弦をはじき鳴らす弦打ち二十人が二列に並んでいる。夕時の御湯殿儀式も同様のことが行なわれるが（深夜〇時頃で、浴湯はない）、読書博士は替り、伊勢守源致時が孝経を読み（源致時とあるが、式部の誤記で実際は藤原広業であったらしい）、大江挙周（匡衡の子で母は歌人赤染衛門。匡房の祖父）が『史記』文帝の巻を読み、七日の間、この三人が交代で務めたと記されているが、戦国期に天皇家が経済的に没落すると、湯殿始や読書鳴弦の儀式も記録上確認できなくなった。明治期に入って廃絶しつつあった江戸時代の宮廷行事を記録するため、岩倉具視らによって編纂された『公事録』には、湯殿始・読書鳴弦の儀が行なわれていたことが記されているが、明治以降、天皇家の諸行事も変容を遂げ、出産は御産所（病院も含む）で行われるようになり、御湯殿の儀式は廃絶した。

令和四年十一月

権禰宜の個展開催

二十二日より二十七日の間、神戸市中央区北野坂のダイヤモンドギャラリーで、当社権禰宜小林晴美（雅号・美鳳）の第四回目となる個展が開催された。

今回は山水画（水墨）に『万葉集』巻五にある「梅花歌三十二首」の漢文の、「初春の令月にして 気淑く風和ぎ、…」という序文一部をも書した襖絵表裏四面（令和元年作）の他、書は前衛書、日本画の抽象画作品と、色紙などの小作品を合わせ五十点が展示された。

期間中はコロナ感染が終息していない時期でもあり、来場者は約七〇名の方々が鑑賞した。その中でも前回の個展でご高覧頂いた具体美術家の堀尾貞治氏のご家族の御来場も賜り、一点一点丁寧にご覧いただけたことや、神社崇敬者の方々も多数ご来場頂き、作品に強い関心を持って頂いたことが嬉しかったと、美鳳も喜んでいた。

尚、神戸・読売・毎日の各新聞にはこの個展開催の記事が掲載された。

個展案内状

個展会場風景

令和五年一月

年頭氏子崇敬者繁栄祈願祭斎行

正月三日、「氏子崇敬者繁栄祈願祭」を総代・氏子崇敬者二十一名の参列のもと厳かに斎行し、今年一年の参列者各位はもとより、氏子崇敬者更に各事業所の安寧と繁栄を祈願した。

ご神前での民謡独唱

本年の神前奉納は、十八歳から民謡を始め、弘田るみ師（昭和六十二年の「産経民謡大賞」最優秀賞受賞者）に師事し、平成十二年青森県弘前市での「津軽民謡大会」で優秀賞、平成二十一年大阪での「産経民謡大賞」で優秀賞を受賞するなどの経歴を持たれているが、最近は高齢者施設などで民謡を披露するなどの社会福祉活動を主に行っておられる民謡歌手の山田洋子先生である。

奉納唄は、津軽富士とも呼ばれる岩木山の四季の移ろいを唄う「津軽山唄」、十勝の牧場の様子唄「十勝馬唄」、和ロウソクや鬢付け油の原料となる櫨の実を採る様子唄「櫨採り唄」の竹もの民謡三曲で、昨年神前奉納していただいた竹尾学先生が尺八で伴奏された。

参列者も先生の感情を込めた張りのある民謡唄、また尺八の吹奏に聞き入りご満悦であった。

式典後、参列者一同破魔矢を持ち、鳥居前にて記念写真を撮ったが、時節柄各位に弁当を渡し直会に変えた。

鳥居前での記念写真

令和 五年三月

「神戸新聞」てくてく神戸 ～兵庫津編～に掲載される

「神戸新聞」二十二日の朝刊、てくてく神戸～兵庫津編～に「生田神社と深い関係」の見出しで当社が写真（神功皇后像を入れた社殿写真、

神功皇后上陸此地碑）と簡単な記事ではあるが掲載された。

生田神社と深い関係
神功皇后上陸の言い伝えも

「神戸新聞」記事

記事を抜粋すれば、①「実際、和田岬にある三石神社には、神功皇后が上陸したとの由緒が残る。東京五輪柔道金メダリストの阿部一二三、詩きょうだいが参拝したことで有名な神社だが、祭神は神功皇后で弓矢を持つ像が立っている」、②「交通の要衝地であった和田岬（兵庫津）には、古代から多くのモノや文化がもたらされました。見たこともない文物が入ってくるこの地は、人々から『聖地』のように神秘的に映ったかもしれません」、③「神戸港で神託を受けた神功皇后が和田岬に上陸し」、④「神功皇后と関係が深い和田岬は『神戸始まりの地』と言えるのではないかと思った」などなどが記され、見出しのように、和田岬と生田神社の関係を述べているが、要するに神功皇后が西暦二〇一年、朝鮮半島からの凱旋中、神戸沖で船が進まなくなり、和田岬に上陸し、その理由を占ったところ、生田神社などを祀れとの神託を受けた。その上陸したとする地が三石神社であるということの紹介である。

令和五年五月

例大祭と神幸式斎行

三月、新型コロナウイルス感染防止のマスク使用も個人の判断となり、さらに五月八日、政府は新型コロナウイルス感染症の位置づけを「5類」に引き下げたため、本年、四年ぶりに例大祭神幸式を斎行した。

大祭前の四月二十三日、猿田彦会総会前に猿田彦担当地区総代一名・猿田彦会会長他三名計五名参列のもと、兵庫区今出在家町の豊永晃誠君（二十一歳）の猿田彦決定奉告祭も斎行され、大祭日の五月十九日（金曜日）、午後六時からの例祭には、区内神職のご助勤奉仕により、総代・氏子自治会長始め氏子崇敬者十四名の参列のもと、例年通り巫女による神前神楽も奉納し厳粛に斎行した。後、会館二階にて直会に入った。

御崎公園スタジアム前での記念写真

二十日（土曜日）午前八時より、各地区お旅所の入魂修祓式を斎行し（諸事情により、本年の御旅所は北部南、東部の二箇所のみであった）、午後一時半より、地区総代・氏子役員・自治会関係者の指導により、子供みこし三基（例年四基の子供みこしが巡行しているが、南部氏子会が奉仕者がいないということで本年は子供みこしを出さなかった。後日神社に、南部氏子の人から、子供みこしが廻ってこなかったのは寂しかったとのお声が届いた）が神輿唄を声高らかに唄いながら氏子町内を巡幸、午後三時半を以って無事終了した。例年通り事故の無きよう各子供みこしには自社雇のガードマンが付き、兵庫警察署派遣六名の警察官らが警備と交通整理にあたった。

二十一日（日曜日）、五月晴れに恵まれ、例大祭最大の神事である神幸式が賑々しく斎行された。午後一時過ぎの殿内発輿祭斎行後の二時前より、豊永晃誠君扮する猿田彦の勇壮な踊りに続き、直垂装束姿の総代や、和田岬小学生達の直垂装束の神宝持役十四名、吉田中学校生男女三十二名（付添先生五名）による本神輿舁上げ役、宮司太刀持役である西区井吹台北町の森光海吏君（中一）も母親共々に行列に加わり、その後に各地区子供みこし三基、総勢

約一五〇名の神幸式大行列が出発し、約二時間半かけて氏子内を巡幸した。例年より少なく感じられたが、巡幸道の氏子の人達も、四年ぶりの神幸式に拍手を以って出迎えると共に、氏神様の巡幸に手を合せ祈念していた。また、御崎公園での給水休憩では、猿田彦の豊永家親族多数が詰めかけ記念写真に納まっていた。

午後六時から、会館二階にて神幸式奉仕の総代始め氏子三地区（北部北・北部南・東部）の人達又猿田彦会員達の出席による合同直会が開催され、無事神幸式が斎行できた喜びで盛り上がっていた。

令和五年六月

氏子崇敬者親睦旅行

本年の氏子崇敬者親睦旅行は、加西市・丹波篠山市方面への日帰りバス旅行を実施した。

二十五日、宮司を含め総代・氏子崇敬者十四名（北部氏子会六名・南部氏子会一名・猿田彦会三名・崇敬者三名）の参加のもと、先ず川西市五百羅漢石仏を拝観した。誰が造立させたのか五〇〇体の石仏の彫技は稚拙ではあるが、その込められた純真な信仰心に心打たれる。後、同市鶉野町の鶉野飛行場跡のミュージアムにて戦前の局地戦闘機「紫電改」（実物大模型）や、当地から飛び立った神風特別攻撃隊「白鷺隊」の遺書などを見学し、ここで飛行訓練を重ねた特攻隊員六十三名が出撃した史実を初めて学んだ。

丹波篠山市に移動し、丹波満載御前の昼食を食し、同市の丹波伝統工芸公園内の立杭「陶の郷」の陶芸教室で参加者全員四寸皿の絵付け体験をした後、神戸市北区赤松台の「かねふくめんたいパーク」に立寄り、工場見学と買物を楽しみ無事親睦旅行を終えた。

尚、「陶の郷」での各自が体験した絵皿が八月八日に届いたので、鶉野飛行場跡の「紫電改」をバックにした記念写真共々参加者各位に配布した。

「紫電改」前での記念写真

令和五年七月

夏越祭（夏祭り）斎行

十七・十八日の両日、相殿に祀る素盞嗚命（すさのおの）の夏越祭は、疫病退散・無病息災祈願の祭であり、一人でも多くの氏子崇敬者の方々が無病息災で過ごしていただけるよう従来通り茅の輪くぐり神事を斎行した（但し、例年の神前奉納、琉球舞踊は中止した）。

十七日午後六時からの殿内祭典には、総代・氏子崇敬者九名参列のもと、宮司が大祓詞・祝詞奏上の後、参列者代表各位が玉串奉奠した。

更に、境内に設けた「大茅の輪くぐり」神事では、宮司・禰宜に続き参列者一同が『拾遺和歌集』に収められている古歌と「蘇民将来、蘇民将来」と唱えつつ左・右・左とくぐり、人が知らず知らずのうちに犯した罪や過ち、心身の穢れを祓い清め、また流行り病の無感染、夏の無病息災を祈願した後、二Fにての直会では神職手作りで無病息災のご利益ある「蘇民将来茅の輪守」をお渡しした。

茅の輪くぐり神事

令和五年九月

西宮神社海上渡御産宮参り

二十三日、商売繁盛の神で知られる西宮市の西宮えびす神社（西宮神社）の令和三年より延期となっていた二十回記念海上渡御「産宮参り」三石神社参拝が予定通り斎行された。

平成十四年から斎行された西宮神社の和田岬への船渡御は、平安時代から行われていたが、織田信長の社領没収で途絶えていたものを約四〇〇年ぶりに復活させたものである。

ところで、当社への産宮参りの由

来は『西宮神主家日記・西宮大神本紀』（江戸時代の宝暦五（一七五五）年）の絵に神輿が兵庫和田崎に御駐輦の処を描き、御輿三輿をそれぞれ奉安せる三つの石が描かれている。即ち廣田・西宮・南宮三社の神輿である。これを三つ石と呼称したと記されている。

御殿前での記念写真

さて、当日午後二過ぎから和田神社境内駐車場を斎場として神輿を据えて御旅所祭を斎行した後の午後三時前に当社総代（土佐岡・釜須・高口）、氏子自治会長（嬉野）他氏子二名が参道で奉迎する中、西宮神社吉井宮司・同清水神社総代・八乙女・童男親子・祭員三名など十五名が昇殿し、修祓を受けた後、西宮神社宮司、当社総代が玉串拝礼参拝した。参拝を終えた後、拝殿前で一同記念写真を撮り、御旅所斎場に向かった。

社殿屋根葺き替え事業・銅板御寄進者ご芳名

（含　申込・分納・追加、
令和四年十一月から
令和五年十月末日まで）
順不同・敬称略

銅板奉納者全ての方々のご芳名は、神社台帳に記録の上永く保存させていただきますが、境内掲示板のご芳名掲示は三枚以上とさせていただきます。

境内の奉賛芳名掲示板

趣意とお願い

現社殿は昭和三十八年に竣工して、約六十年となります。

銅板の寿命は約七、八十年といわれています。そこで将来銅板屋根の葺き替えを行なわなければなりません。

そのような事情により、皆々様に**銅板寄進（一枚三千円）**をお願いいたしております。

社殿銅板屋根にあなた様のお名前を残し、更なる三石大神のご加護により、貴社・貴家の益々の弥栄をご祈念申し上げたくご案内申し上げます。

既にご奉納いただきました方々には重ねてのご案内となりましたことをご了承下さい。

尚、はじめ銅板一枚二千円といたしておりましたが、銅の値上がりもあり、三千円（一、五枚と計上）とさせていただきました。宜しくご理解ご了承をお願い申し上げます。

当社で命名に関係されたお子様のお健やかなご成長をご祈念申し上げます。（命名書のみの受付も行っております。）

新生児命名
令和四年十一月から
令和五年十月末日まで

シリーズ
社務所・境内紹介

拝殿右側の引き戸に、故女流書家望月美佐先生の作品がある。

望月先生は、仮名を安東聖空、漢字を広津雲仙、篆刻を喜田谷苑、南画を水越松南らに師事し、日展に連続十回入選した機を以って不出品を決意し、「鳳美社」を設立して昭和五十二年より望月流書道を興す。その年のＮＨＫ大河ドラマ「新・平家物語」の題字を担当（以後三度）、東京銀座の紀伊国屋画廊の個展をはじめ毎年各地の有名百貨店で個展を開催し、テレビ出演も多く一匹狼ならぬ一匹ウサギの「書道家望月美佐」と称され、海外にも日本の書を紹介するなど活躍した。

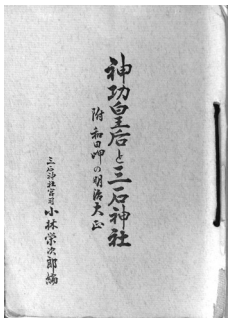
本作品は経年の為日焼けしているが、書されている「生きている すべての人とふれあって心あたため生きたいものを」の句には情け深い慈愛の心で生きよとの教えが汲み取れる。

この作品は、四十数年前、宮司が兵庫県神道青年会の役員をしていた時、舞子ヴィラでの総会に望月先生

望月美佐先生の書

を招聘し講演頂いたが、その講演中書したものを先生の了解を得て宮司が拝領したものである。元は三六判（一八〇cm×九〇cm）に書したものであったが、当方が引き戸二面に貼るため二枚とした。

シリーズ 書籍に見る三石さん



『神功皇后と三石神社』
附和田岬の明治大正

本書は昭和四十四（一九六九）年二月、当社前宮司小林栄次郎（故人）の著した小冊子で、「和田岬の明治大正」欄に、古き和田岬での事件、出来事も記されており、現在の人達にも知って頂きたいと思い、現代文に直し取り上げた。

○畠の肥溜

享保年間（一七一六～一七三六年）切戸（兵庫区切戸町）の井上八郎右衛門が、幕府に願い出て、和田岬一帯の払下げを受け、今和田新田村として開墾したが、土地は砂地のため稲作は出来ず、畠として胡瓜や茄子・葱などの野菜が作られ、特に今和田新田村の葱は有名で、葱を取扱う商人を「ねぶかや」といい、大正の初期頃まで農業組合（南農業組合）もあった。三石神社には南農業組合が大正二年二月に奉納した注連柱が現存している。

明治の中頃、石炭仲仕の親分（磯部寅吉）の子分達は、暇な時は飲むか博打をするかで、博打では度々警察に踏み込まれて現行犯逮捕されていたが、要領のよい者は遠矢の浜に逃げ、畠の肥壺に首までつかり隠れ、悪臭を我慢して夜の明けるのを待って着物を捨て海に飛び込み、体を洗って丸裸のまま附近の漁師の家に行き、着物を借りほとぼりのさめるまで各地へ身を隠したそうである。

○大島組と磯部組の喧嘩

古老の言うに、忘れもしませんが、明治三十三（一九〇〇）年七月九日（旧暦）の薬仙寺（神戸市兵庫区今出在家町）の四万六千日の観音さんのお祭で賑わっている夜のこと、大島組と石炭仲仕の磯部組との喧嘩出入があった。双方の組員達は、浴衣の尻端折りにねじり鉢巻姿で、血相を変え抜刀して走り行くのを見て、祭見物者もこわくなり皆我が家へ飛んで帰った。あの時は生きた心持もしなかったほど吃驚し、本当に怖かったと、首を撫でつつ遠い昔の出来事を思い出して話してくれた。

令和六年 年頭授与絵画
美凰 画

印刷所
(有)前川企画印刷
神戸市兵庫区永沢町三丁目三―十
TEL（〇七八）五七七―二四八八
FAX（〇七八）五七七―七二二〇